

白いページ



開高健

白いページ●

潮出版社

白いページ II

昭和 50 年 10 月 15 日 印刷

昭和 50 年 10 月 25 日 初版

著者 開 高 健

発行者 島 津 矩 久

東京都千代田区飯田橋3-1-3

発行所 株式会社 潮 出 版 社

電話 (230) 0781 (編集) 振替東京61090
(230) 0741 (営業) 〒102

印刷・製本 図書印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

© T. Kaiko 1975 Printed in Japan

白いページ
目次

遠望する	7
解禁する	17
無駄をする	27
読む	37
続・読む	47
試めす	57
続・試めす	67
続々・試めす	77
伝授される	87
枯渴する	97
火をつける	107

思いだす

119

続・思いだす

129

勵む

139

釣る

149

罵る

159

探究する

169

遂げる

179

判定する

197

もどる

207

申上げる

217

証言する

227

装帧 枡折久美子

白
紙
二

掲載誌『潮』一九七二年十一月号―七五年二月号

但し、「続・読む」は七五年五月号、「証言する」
は『面白半分』一九七四年八月臨時増刊号

遠望する

ある作品の書きだしの一語が決定できなくて私はもう何カ月もあがいている。その一語を蒸溜することが目下の私の大仕事で、何をどうしていいのやら、見当がつかず、とどのつまり、寝たり起きたりしている。その一語がきまったところで、つぎからつぎへと、どうしていいか見当のつけようのない大仕事が蔽いかぶさってくることはほぼわかつているが、とにかく出発の一語が見つかからないことにはどうしようもない。この作品は二年前に新潟県の山奥の銀山湖の村杉小屋で石油ランプで暮していたころには題も展開も決定し、顔と姿勢のある部分はかなり肉眼に見えていた作品なのだが、追っていくうちにとつぜん支脈の一つが独立して成長してしまい、それを追うことに昨年を費してしまった。その作品は昨年雑誌に発表することができ、今年になって単行本にして刊行することができ、いわばすっかり排泄し終ったのだが、さて苦しかった一仕事が

すんで、それを生んでくれた母胎を完成させようと、いまもどってみると、展開、顔、姿勢、何もかも朦朧もうちやうとしているのである。部屋にこもって、ただ寝たり起きたり、人にも会わず、酒場にもでかけず、パーティーにもでない。ときどき手をのばしてテレビのスイッチをひねる。あまりの阿呆くささにすぐ切る。けれど一時間か二時間たつと、また手をのばしてひねり、また切ってしまう。運動不足と形而上的集中の必然の結果として頬や腹がだぶだぶと肥厚してくる。そうやって私が書きだしの一語の滴下を待ちつつ毎日毎日、ただごろっちらとしているところを知らない人が目撃したならば、すぐさまアフリカの川で泥浴びにうつとりと眼を細めている河馬が連想されるであろう。けれど、いささか観察ということに素養のある人ならば、河馬には何がしかの敬意をおぼえないではいられないはずである。なぜなら、もしゴリラの顔に漂う一種の高貴さを「慍悍なる憂鬱」と呼ぶとするならば、河馬の顔に目撃されるそれは、「偉大なる怠惰」と呼ばれていいものだからである。怠惰はそのような相貌を持つことがあると、大いにして精緻なる自然は暗示してくれているのである。

九月五日。そういう怠惰のなかで手をのばしてなにげなくダイヤルをひねってみたら、オリンピック中継をやっていて、とつぜん臨時ニュースとして、イスラエル選手団の宿舎がパレスチナ・アラブのテロリスト群によって占拠されたと告げている。翌日、九月六日、気になってまたダイヤルをひねってみると、イスラエル選手団とテロリストたちはテロリストたちの要請によって

ミュンヘン空港までバスではこぼれ、そこで西ドイツの警官と乱射の応酬があり、その結果として人質は全員死亡、テロリストたちも三人をのこして死亡だという。私はアフリカの河馬として寢床によこたわったまま、日頃ほとんど読んだことのない新聞を側近に持ってこさせて、別種の具体的形而上の集中にふける。しばらくすると電話があらちちらの新聞社や週刊誌からかってくるが、イスラエルに私は二度いつてるけれど村松剛君のほうをもっとうちこんでいるから、というて、みんないんぎんに、愛想よく、けれど誠意のこもった声音で御辞退する。九月七日の一日も河馬のようにごろんところがったままですごし、ああであろうか、こうであろうかと、朦朧とした情報群をまえにして朦朧とさまよい歩く。新聞を見ると、平和なオリンピックが血でめちやくちやになったとか、なぜ人質全員がみなごろしになるような結果を招くような措置にでたのかとか、さまざまな意見が百花斉放している。そのうちで、ブランデー会長とイスラエル政府が別箇だがそれぞれ口をそろえてテロリストたちを国外にださないようにと西独政府に要請したという報道が私の眼をひく。その際、両者が、西独政府に、テロリストたちを、生きたまま止めるようにといったのか、殺してでも止めるようにといったのか、生死を問わず止めるようにといったのか。そのあたりのことはわからない。

九月八日、私が河馬のように昼寝しているところへ『サンデー毎日』の早瀬君が家へじかにやってくる。何かいえ、何か書けという。私は六九年にビアフラのあとでイスラエルへいったが、

帰国してからは純文学一途という方針で暮しているから何もホットなことはない、村松剛君のところへいったほうがいいでしょうというが、早瀬君は頑としてヒキガエルのように応接三点セットにうづくまってひきさがろうとしない。やむなく意見を口述し、それを筆記してもらう。

日本の赤軍派の若者がテルアヴィヴのロッド空港で乱射事件をひきおこしたあとなのだからこのオリンピックでもイスラエル選手団に何かあるのじゃないかと考えて当然なのじゃないか、だからイスラエル選手団は警備を厳重にしてくれと西独警察にたのんだらしいが警察側は甘かったらしいじゃないか、しかし、ひとたび決死を覚悟したテロリストというものは全体主義国風の戒厳令を布くでもないかぎり浸透を防圧できるものではない、西独警察の無謀なみなごろし作戦が非難されているようであるが、すべて誘拐事件にはどれくらい慎重に解決を計ってもどこかできつと一か八かの「賭け」が入ってくることは防げないのであつて……というように話を話すうち、今後、つまり明日にでも起るかしない反応を、つぎのようにおおまかに私は要約した。

①イスラエルはきつと報復行動にでる。

②その結果、パレスチナ・アラブ・ゲリラの根拠地がたたかれる。その結果、ゲリラも死ぬが、女や子供たちも巻きぞえで殺されることになる。この女や子供たちは食うや食わずの状態にある。

③その惨禍のあげくパレスチナ・アラブ過激派の団結よりは、むしろ分裂が深まるのじゃないか。

④地上軍の進攻はあるかもしれない。けれども二つのうちどちらだと聞かれ
ば、ないと賭ける。

⑤あってもヒット・エンド・ランで終るだろう。

⑥国際事件にはなるまい。

翌九月九日、イスラエル空軍がレバノンとシリアのパレスチナ・アラブ過激派の根拠地を空襲し、ベイルート発AFP電によると、子供七人を含む十五人が死亡、二十四人が負傷、二人が行方不明とある。私は早瀬君の口述筆記を読んだあと毎日新聞社へいき、午後五時までに八枚という約束でテールにすわる。それから一週間近く私の「予言」は十割まで的中していた。しかし、九月十六日にイスラエル軍がタンクや装甲車を先頭に歩兵多数とともにレバノンへ侵攻したというニュースを読み、④の、地上軍の進攻はないと賭ける、という賭けがもろくも崩壊したことを知らされる。

ところがその翌日の九月十七日には全軍がイスラエル領へ引揚げたというニュースを知らされる。⑤の、地上軍の進攻はあってもヒット・エンド・ランで終る、という予測が的中したわけである。あれやこれやを総合してみると、この原稿を書いている九月十九日現在、私の予測のうち九割が的中し、一割があたりなかったということになる。

(ただし、ゲリラ根拠地の粉碎という作戦方式からして、レバノンは一応終わったとしてもシリアについては現在、どうなるか、わからない。レバノンとおなじようにイスラエル地上軍が進攻するのか、どうか。私は何も知らないし、予測もたてられない。ただいえることは、それがあっても私はニューズに接して何もおどろかないし、おそらく同地域において「全面戦争」が発生することはあるまいと踏んでいる。)

予測が九割的中したからといって私が得意になっているわけではない。それは戦乱国をつぎからつぎへと巡歴しているうちに私の身についた防衛反応なのである。三年間眠りこんでいたそれがふいに流血でヤスリをかけられ、垢を落された結果なのである。戦乱国または準戦乱国を巡歴していると、朝起きて新聞を読み、または貧民街のチャプスイ屋へ行ってラーメンやおかゆをすするうちに眼にし、耳にする、すべての小さなニューズ、大きなニューズで、その日の行動の計画をたてなければならぬし、「本能」とか、「第六感」に賭けてうごかなければならぬこともしばしばである。そのため、一つのニューズを読んで、その事件の背後にあるそれまでの経過、当事者双方のおかれている現状、指導者たちの思考法、戦術、戦略、一つの反応に一つの反応を返すか、三つの反応を一つにまとめて返すか、じつにさまざまなことを一杯のおかゆ、一杯のミルク・コーヒーをすすっているうちに総合して考え、すすり終ったあとで朦朧のうちにその日の行動計画を決定しなければならない。そのなかにはしばしばじつにおびただし、しばしば大げ

さで幼稚と思える“覚悟”も含まれてくるのである。それが不当であったか、適切であったかは、すべてあとになってから、無事に生きのびられたあとで“結果”を眺める一段高いところにある心情の判断することである。

そして血を流して抗争しあうしかない二者がいるときには、ひとつの事件にたいする反応を予測するとなると、それはとどのつまり、人間性というこの広大で朦朧としたものをその場、その場にのぞんでどう察しをつけるかということにつきる。それらのフィーリングからの憶測であった。

アラブ×イスラエルの反応はこの二十五年間にどの反応がどの結果になり、どの攻撃がどの報復になったか、誰もたやすくその場で指摘できないくらいこんがらかってしまった。アレをやったからコレをやり、コレをやったからアレをやるというのが、あまりに相互の“反応”がおびただしくなりすぎて、独立的に一つのことが指摘できないのである。

たとえば九月十六日のレバノンへのイスラエル軍の侵攻はミュンヘン事件への報復であるとするのが第三者たちの批評であるが、たとえミュンヘン事件がなくても出撃の口実はいくらでもあるというのがイスラエル将兵たちの卒直な感想ではないだろうか。同様のことをパレスチナ・アラブ・ゲリラの心情についてもいうことができるのではないだろうか。つまりこれは双方にとつて“オペレイション・ティット・フォー・タット(しつぺ返し作戦)”ということになっているの

ではあるまいか。たまたまミュンヘン事件は外部に報道されたけれど、いちいち日本に報道されることのないヤッタ・ヤラレタが相互にとって、日々、週々、月々、あまりに多すぎるのが、現場での現実である。

イスラエル政府が西独側にテロリストたちを国外にださないようにと要請したのが事実とするならば、イスラエルは従来の方針を変えなかったのである。これまで同政府は同政府の手の及ぶ範囲内で発生したこの種の外圧については断固とした反応に出ることを政策としてきた。もしここでゲリラたちに有利になるような態度をとれば今後ますます同種の誘拐や虐殺事件が発生するであろう。ゲリラたちは出撃にあたっていくら死を覚悟しているもの、もしやり方によっては自分たちの宣伝もでき、獲物も獲得でき、しかもひょっとしたら一命をとることがあるかもしれないとなれば、それは彼らにとって“勝利”であり、イスラエルにとっての“妥協”であると考えるであろうから、ますます後継者がふえ、事件が頻発することであろう。ここでテロリストたちを断固と防圧したところで今後のテロを防圧することにはなるまいが、妥協するよりは粉碎したほうがいくらかでもテロリストたちの姿勢を弱めることになりはしまいかと、イスラエル政府は考え、すでにテロリストたちの手におちてしまった人質はあきらめるしかない涙を吞んで切りすてる行動にでたのではあるまいかと推されるのである。もしそうだとするなら、第三者がその態度を非情だとか、冷酷だとか、いくら批評したってはじまらない。そもそもイスラエ